教員研修の高度化に資するモデル開発事業成果報告書

デジタル技術を活用した校内研修活性化のため指導主事や研修担当教員への校内研修高度化支援システムの開発

鳴門教育大学

本報告書は、文部科学省の教育政策推進事業委託費による委託事業として、鳴門教育大学が実施した令和４年度教員研修の高度化に資するモデル開発事業の成果を取りまとめたものです。

従って、本報告書の複製、転載、引用等には文部科学省の承認手続きが必要です。

１　課題認識

徳島県では、3 年計画で県内すべての幼稚園と小中学校に指導主事の計画訪問（1 年間約 100 校）を行っているまた、これらの事業は、基本的にはこれまでの授業研究の形式をとっており授業公開、研究会という流れで行っている。しかし、この方法では校内研修の活性化までは至っておらず授業者の教科の授業力の査定・評価的であることも否めない。そのため、この計画訪問が義務的になり形骸化されたものになっている恐れがあり、校内研修の活性化には至っていないと考える。そこで、この計画訪問を契機に学校自らが継続的に授業改善もしくは校内研修の活性化に向けていけるような事業に衣替えしていくことが必要となる。

そこで、指導主事訪問を単発のイベントではなく、教師の成長と改善を支援するための一部と考え、フォローアッププロセスや継続的な支援体制を整えることを目的に、校内研修の活性化のための発信拠点として、地域ごとに拠点校を 10 校設定し、本学と共同で２～３年間継続的に学校支援を行う「大学連携強化！学校力向上拠点校事業」を行っている。

しかし、ここでも新たな課題がみられる。指導主事に対する学校からのニーズは、学習指導だけではなく、生徒指導、学校経営等多岐にわたる。また、そのひとつを取り上げても、アセスメントを含めた学校状況の分析、考察、改善プランの提供、実施方法、評価など教科指導の専門家としての指導主事のこれまでの役割を越えた機能を求められている。また、長期に関わることにより、学校の課題も変化し臨機応変な対応が求められる。つまり、指導主事には､学校全般にわたるコンサルテーション機能が求められていると考えられる。そのように考えていくと、学校を支援する指導主事を支援することも必要となる。そこで、この取り組みは、大学教員と指導主事がチームを作り継続的に学校支援を行い学力向上や組織改革など学校力を向上させる取り組みを行っている。しかしここでも、指導主事の業務の多忙化が進んでいる現状では、指導主事をサポートするために大学教員がチームとして配置されていても時間と空間の制約があり臨機応変に対応することができない。

また、学校は、教員の力量形成の中心である校内研修を活性化したいという思いは強い。徳島県では、その活性化のキーパーソンとして研修担当教員を位置づけ、その力量形成を進めながら校内研修を活性化しようと考えている。しかし、日常業務の中で課題や問題が生じたときどのように解決していけばよいかというような支援に関しては手つかずのままである。

実際、そのような支援を行う役割を担っているのは指導主事であるが、現状では、都市部の教育委員会には支援の体制がある程度備わっている（指導主事が常駐している）こともあるが、都市部を離れた教育委員会では指導主事の配置もない所もある。そうなると指導主事からの十分な支援を受けることなく校内の教職員による自助努力により達成するしかない。また、研修担当教員が直接指導主事に支援を求めることのハードルも高く、求められても対応できないという課題もある。このような状況は、徳島県に特徴的に見られるものであり、全国的に散見できるものである。それ故、指導主事や研修担当教員への支援の在り方とその継続性について再考する必要がある。

２　事業目的

学校で校内研修の活性化を担う指導教諭等を研修担当教員とする即時性と継続性を兼ね備えた教育委員会と大学が連携したオンライン支援システムを開発する。

このシステムは、指導主事の配置のない地域や様々な要因により支援を受けにくい学校において、効果を上げることのできるものと考える。

３　事業の具体的な内容・取組方法

１　コーディネーター室の設置と運営方法

大学に学校支援コーディネーター室を配置し、教育センターから派遣された指導主事と大学職員を配置する。このコーディネーター室では、学校や指導教諭からの学校経営全般に関わる相談活動等を行うプラットホームとして構築する。コーディネーターは、学校や指導教諭からの相談内容に応じて、最適と考えられる大学教員に支援活動を要請する。日時等を決定した上で、大学教員のアドバイザーによるオンラインによる支援活動を行うものである。

（１）学校支援コーディネーター室

大学に．教育委員会と共同設置する学校支援コーディネーター室を配置し、教育センターから派遣された指導主事と大学職員をコーディネーターとして配置する。さらに、コーディネーター業務を円滑に行うために事務担当職員を配置する。

このコーディネーター室では、学校訪問等を行う指導主事や当該校の研修担当教員からの学校経営全般に関わる相談活動等を行うプラットホームとして構築する。

（２）コーディネーターの役割

コーディネーター室が運営するHPを構築し、チャットとメールによる相談活動を実施する。それにより、問題・課題の把握、求められている内容・方法等を把握する。それでも状況が把握できない場合は、電話やオンライン会議システム等を活用して状況を把握する。

コーディネーターは、簡易なものはその場で対応するが、そうでない場合は、相談内容について大学教員と協議し、最適と考えられる大学教員に支援活動を要請する。日時等を決定した上で、大学教員のアドバイザーによるオンラインによる支援活動を行う。必要があれば、オンラインによる大学教員の学校への直接的支援を行う。

（３）指導主事・研修担当教員

指導主事や研修担当教員はその支援を受けて校内研修の高度化を行う。経過等を報告し、継続的な支援が必要な場合は、アドバイザーと協議等を行う。

２　事業実施の方法

このシステム開発の有効性を検討するために、大学が教育委員会と共同実施を行っている「大学連携強化！学校力向上拠点校事業」と指導教諭研修をフィールドとして実施し、次年度実施に向けての効果

測定や課題を明らかにする。

（１）校内研修の活性化のための指導主事に対する支援の継続性を含めた体制

先に示したように、本学と徳島県教育委員会が連携して校内研修の活性化を狙って実施している「大学連携強化！学校力向上拠点校事業」をフィールドとして活用する。これは、指導主事と大学教員がチームを作り、市町村教育委員会の推薦を受けた小・中学校並びに県立中学校等を，学校力向上拠点校（以下「拠点校」）に指定し，大学と連携して，市町村教育委員会，県教育委員会と拠点校による学校力向上に向けた実践研究を行うものである。ここでの取り組みで得られた成果を計画訪問に取り入れることで学校改善・授業改善に資する。

内容を以下に示す。

①指導主事が行った拠点校のアセスメント結果についてオンラインで大学教員と協議する。

回数は、状況を見て１から５回程度

②校内研修計画の立案、実施計画等を指導主事、学校担当者、大学教員でオンライン機能を活用して（条件が許せば当該校にて）校内研修の支援活動を等して、

③実施中の指導主事に対する大学教員のオンラインによる支援

状況に応じて、必要回数

④指導主事による学校の担当者へのオンラインによる支援

状況に応じて、必要回数

⑤大学教員の校内研修に対する講演や演習など直接的支援

状況に応じて、必要回数

*この実践で得られた知見やシステムを指導主事計画訪問に応用する。

（２）学校で校内研修の活性化を担う指導教諭への支援体制の課題

本県の指導教諭には悉皆研修として、毎年、指導教諭研修の受講が求められている。現在、約８０名（小中学校の約３分の１に配置、今後も配置校は増加していく傾向）の指導教諭が受講してる。県教育委員会としては、各学校の配置された指導教諭をキーマンにして校内研修の活性化をめざしている。

この研修は、各個人が設定した校内研修に関する自己の研修テーマを設定しそれを１年かけて PDCA サイクルを回し、それぞれのステップにおいてレポートにまとめて提出し、それに対してコメントを付記して返却していくものである。しかし、これには校内研修の担当者である指導教諭を支援するシステムがなく、実施しているときに生じた課題や問題を解決するのは指導教諭の力量にゆだねていてそれを支援するシステムが構築されていない。

コーディネーターは、簡易なものはその場で対応するが、そうでない場合は、相談内容について大学教員と協議し、最適と考えられる大学教員に支援活動を要請する。日時等を決定した上で、大学教員のアドバイザーによるオンラインによる支援活動を行う。必要があれば、オンラインによる大学教員の学

校への直接的支援を行う。

（３）指導主事・研修担当教員

指導主事や研修担当教員はその支援を受けて校内研修の高度化を行う。経過等を報告し、継続的な支援が必要な場合は、アドバイザーと協議等を行う。

現在この制度に登録している大学教員は１０８名であり、それぞれの専門領域について学校支援を行っている。

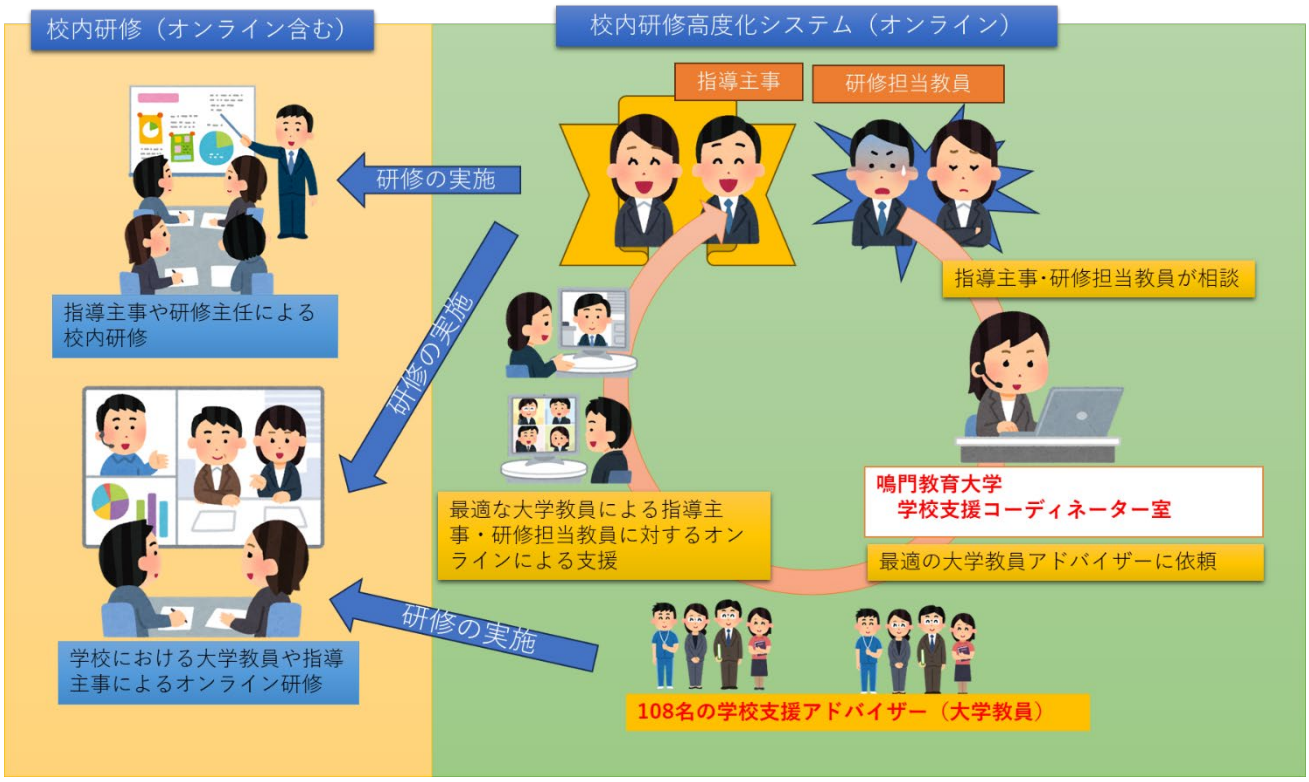

図　校内研修高度化オンライン支援システム

成果

学校支援コーディネーター室の設置

これまで本学には、NITS の地域センターとして、「四国地域教職アライアンス鳴門教育大学センター」が設置されていた。このセンターには、徳島県が実施する研修の高度化のために、教育委員会と大学が協働していくつかの研修の高度化をめざすために学内に大学と教育委員会が業務委託契約を経て共同設置されたものである。

このセンターには、徳島県教育委員会総合教育センター指導主事が週当たり１～２日程度駐在という形で勤務している。そこで今回は、その機能強化のために、徳島県教育委員会との協議を経て、駐在指導主事に対してあらたに、対象指導主事のエフォートも考慮した上で、「学校支援アドバイザー」の兼務をおこなった。これにより本事業は、徳島県教育委員会と大学の協働事業である意味合いを強めることができた。

教員研修高度化オンラインシステム

指導主事に対する大学教員の支援

本学は、徳島県教育委員会と連携協定書を交わし、徳島県教育委員会の教育施策である「大学連携強化！学校力向上拠点校事業」を行っている。この事業は、徳島県下の小中学校数校を拠点校として指定し、校内研修の活性化のための発信拠点として、地域ごとに拠点校を 10 校設定し、本学（大学教員）と県教育委員会（指導主事）との共同で２～３年間継続的に学校支援を行う「大学連携強化！学校力向上拠点校事業」を行っている。

しかし、指導主事と大学教員の連携は時間の確保ということで十分とは言いがたいものもあった。このシステムを利用することにより、時間の制約なく両者の連携が進むと考えられる。また、校内研修の担当者である指導教諭への支援も可能となる。

運用例

教員研修高度化オンラインシステムの完成が、3 月 4 日までずれ込んだため、本年度の運用が難しくなった。しかし、仮運用で行った際の指導主事と大学教員の運用例を以下に示す。

１.指導主事から大学教員宛てのメール

早速ありがとうございます。 パワーポイント修正してみました。 １つめは、しっくりこないのです。真ん中に手立て？が必要? と思い、 ２つめを作成。 どうでしょうか？

３つめは、先生方に送りするものです。
当日は、２つめの物を使って真ん中をみんなでまとめていくと思うのですが、
手元に参考になるように、よい授業を自分なりに考えてくるというものです。

当日の進め方としては、
児童の今の姿と主体的対話的で深い学びを実現している児童の姿を付箋紙に書く。
KJ 法でまとめる。
左から右の姿にするためにどんな手立てが必要か付箋紙に書く？（自分の書いたよい授業の内容を参考に）
または、どんな手立てが必要か話し合う。
それを導入、展開、まとめのどこに位置づけるか。

４つめのパワポは一人ブレストしたものです。
やってみて、導入、展開、まとめでまとまるかしら？と。
手立てを考えたら、
ノート指導とか、
みんなで話し合う場面を毎時間取り入れるとか、
１分間スピーチをまずペアでしてから、みんなの前で話すとか。
真ん中の手立てを導入、展開、まとめにするにはどう研修を展開していくといいのかな？

子どもが変わっていく授業のポイントって
長い目でつけていく力と、
その授業の中だけでできることと２つあるのかな？
そうなると、５つめのパワポのイメージなのです。
どうでしょうか？

２.大学教員から指導主事宛てのメール

いくつかのワークショップ案，お世話になります。

〇事前に案内して，個別に考えをまとめておいてもらう，というのは賛成です。現場に準備をお願いする物は，付箋紙，模造紙，人数分のマーカーですかね。
〇現状→（手だて）→理想の姿　の協議がわかりやすいですね。導入・展開・まとめに分割して考えるのも整理しやすそうです。
この２つを統合して，縦軸に導入・展開・まとめを，横軸に現状→（手だて）→主体的・対話的・深い学び　という表にするのはどうでしょう？
〇ルーブリックはみんなで作成するのが信頼性高くていいのですが，この時間内には困難でしょうね。ワークショップで整理したものを活用するのはとてもいいと思いますが。

さて，私も手ぶらで行くのは恐縮なので，授業づくりのヒントになりそうな資料を作成しています。研修会のはじめに配付するとバイアスがかかって自由な協議を妨げてしまうので，研修会

の終わりに配付することにしようかと考えています。この資料は，私の方で人数分，印刷して持参します。

　他に私が手伝えそうなことがありましたら，指示してください。よろしくお願いいたします。

３.指導主事から大学教員宛てのメール

私は、ある程度、形を示してあげるのがいいのかなと思うのですがどうでしょうか。
よい授業のイメージをみんなで共有する【７月４日】→それに向けて取り組んでみる。【７月５日～】→１１月の研究授業で変容を見る。
すると、やってみたら子どもが変わった、授業が変わったって実感できるんじゃないかと思います。

７月４日の研究会の最後にそれを伝えるか、後日お伝えする、又は８月の学テの会の時に一緒に作って使っていくとかいかがでしょう？
多分、研修でみんなで話し合うと学校にあったポイントがいくつか出てくると思うのです。
おっしゃるように板書の工夫とか、ICT 活用の工夫とか、何が出てくるのかは分からないけど。
それで、そのキーワードでグループを立ち上げて、困ったことやうまくいったこと、アドバイスを書き込めるようにしていくと、さらに深まっていかないでしょうか？
１時間研修やって、はい終わりっていうのでなくて、
続いていく研修にしたいと思うのですが、どうでしょうか？
先生方が、面白そう、やってみたい、やったらよかった、次は違うのを頑張ってみようって思うようなことになるといいなと思うのです。
学校の壁も学年の壁も年齢の壁も越えて。
「子どもたちが楽しく、よく分かって、安心していきいきと活躍できる」ために。

そのチャットは、設定とか使い方に時間がかかるのかな？
私は使ったことがないから分からないから、
〇〇先生（大学教員）の考えるやり方でやるのが一番いいと思う。

どうしましょうか？

今後　ZOOM でお願いいたします。

４.大学教員から指導主事宛てのメール

イメージはライングループを複数作成するというのに近いと思います。
【手順】

1.　例えば「板書の工夫」「つまずいている子への個別サポート」など何通りかの「相談ルーム」を事前に作っておいて，研修会の参加者全員を招待しておく。

2.　研修会でルール説明。「全員が共感的，建設的な投稿を心がける」「役職や年齢にとらわれない」などの基本姿勢も。
3.　関心のある誰かが，最初の投稿をする。悩み事相談でもいいし，アイデアの提供でもいいし。
4.　研修会参加者は，どの「相談ルーム」にも自由に入ることができ，自由に返信できる。
5.　ある程度の時間がきたら，この日のチャットは打ち切り。でも，各学校に帰っても，いつでもチャットの続きができるので，校種間連携はつづく。市のタブレットは他校とチャットできる設定だったので，学校もできるかな，と。

指導主事の学校訪問に関する支援の強化

仮運用は、徳島県教育委員会と鳴門教育大学が令和３年から行っている「大学連携強化！ 学校力向上拠点校事業」でおこなった。これは、指導主事と大学教員がペアとなって授業改善のための校内研修に取り組むものである。これまでの課題は、両者の学校支援に関する打ち合わせや協議の時間を確保することが難しく、指導主事と大学教員が指定校の実態に合った改善策について十分に検討ができなかった。また、支援に当たっての詳細なプランづくりまでできなかったことにある。

仮運用ではあるが、このシステムで、指導主事と大学教員の指定校に関する協議はメールで約 20 回程度、ZOOM で 10 回程度行うことができた。この仮運用により、校内研修における指導主事や研修担当教諭に対する支援の実効性を検証できた。

本システムはメール機能だけでなくチャット機能を持っているため、メールだけでなく即時性を持ちながら多くの研修者の参加に質疑応答も可能である。